

現代文學全集
本日集

21

正宗白鳥集



正宗白鳥集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月三日發行

現代日本文學全集 第二十一篇

著者 正宗白鳥

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇〇
電話芝(43) 四三二一
番番番番番番

「正宗白鳥集」目次

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)

創作篇

塵 ^{ちり}	玉 ^{たま}	何 ^ど	地 ^ち	微 ^ひ	徒 ^と	泥 ^{どろ}	毒 ^{どく}
埃 ^{あひ}	突 ^つ	處 ^こ	獄 ^{ごく}	光 ^{ひかり}	勞 ^{ろう}	形 ^{かたち}	人 ^{ひと}
………	………	………	………	………	………	………	………
三	八	二	四	三	九	二	四〇

命 ^{いのち} の網 ^{なみ}
………
二五

入 ^い 江 ^え のほとり	牛 ^{うし} 部 ^べ 屋 ^や の臭 ^{にお} ひ	死 ^し 者 ^{しや} 生 ^{せい} 者 ^{しや}	心 ^{こころ} 中 ^{ちゆう} 未 ^み 遂 ^{すい}	毒 ^{どく} 婦 ^ふ のやうな女 ^を	人 ^{ひと} さま	生 ^う まざりしならば
………	………	………	………	………	………	………
二〇	三九	三〇	三六	三三	三九	三七

戯曲篇

人 ^{じん} 生 ^{せい} の幸 ^{ちち} 福 ^{ふく}	安 ^あ 土 ^ち の春 ^{はる}
………	………
三三	四八

隨筆評論篇

歡 ^{かん} 迎 ^{げい} されぬ男 ^{をとこ}
………
四四
光 ^{みつ} 秀 ^{ひで} と紹 ^{しやう} 巴 ^は
………
四四六

人 ^{じん} 生 ^{せい} 五 ^ご 十 ^{じふ}
………
四五九
東 ^{とう} 京 ^{きやう}
………
四六八

クリスマスとお正月 ^{おとしげ}
………
四七一

追 ^お 憶 ^{えき} 記 ^き
………
四七五

影 ^{かげ}
………
四八〇

泉 ^{いづみ} のほとり
………
四八三

わが文 ^{ぶん} 學 ^{がく} 小 ^{せう} 觀 ^{くわん}
………
四八六

ダンテについて
………
四八九

(附)隨筆

年 ^{とし} 譜 ^ふ
………
四九〇
跋 ^{はく}
………
四九九

The Imperial Hotel
of Tokyo

自作を讀直して回顧するは、人間は、
少くも文學藝術の方面では、進歩
發展は甚だ遅々たるもので、修養
の效果の微弱であることが察せら
れる。自分について感じるばかりでは
他の作家についてもさう感ぜ
られないことはない。

正宗白鳥

塵

埃

「原稿出切り」と二面の編輯者は叫んで、兩手を伸し息を吐き、やがてゆりゆりりと、ストロップの側へ寄つた。炎々たる火焰の惡どく磨くるしいストロップを煙で取巻いて、破れ椅子に坐してゐるもの、外套のまゝで立つてゐるもの、議會の問題や情夫殺しの消息、明日の雜報の註釋説明批評で賑つてゐる。

「築島君、その女は美人かね」編輯の岸上が一座の中へ割り込んで問を發した。

「實際いゝ女ですよ、青さめて沈んでる所は可憐です、僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね、裁判官たるもの宜しく刑一等を減ずべしだ」三面の外勤築島は、煤けた顔に愛嬌笑ひをして表情的に云ふ。

「そんなのゐい男は、殺されたくても、女の方で御免蒙るさ」

「先づ何であらうと、僕は天命を保つて、十分に面白目を送りたい、いくら色男になつても、出刃庖丁ですばりとやられちゃ駄目だからね」硬派の大澤が立ちかゝつた。

「安心し給へ、見渡したところ、一座中そんな心配のありさうな人はないから。まあお互ひに銀座のほこりを毎日吸つて、ほこりの中の黴菌に生血が吸はれつちまふまで生きてゐるのさ、つまり天壽を保つ者は済し崩しに枯れて行くんだよ。しかしね、稚い木が風に折られてゐるのを見ると、多少風情があるが、蟲に喰はれた枯木を見ると淺間しくなる。こんな枯木的人間が到る處にあるぢやないか」

「岸上流の哲學か」と大澤は時計を見て、縁の切けた山高を被り、「どおりと枯木伯大枝の駄法螺を聞きに行かうか」と、戸口へ行つた。

「枯木でも風が當りや鳴るんだ、大枝なんか、つまり悲鳴を擧げてゐるのさ」

一座はそれ／＼自分の席へ歸つて、編輯局は暫らく靜かになつた。予は北側の机で、窓硝子の壞れから吹き込む鋭い風に、春筋を採まれながら、小野道吉君と差向ひで、校正に従事して局外から編輯の光景を窺つてゐる。南米遠征の企ての破れてより、何か有望の事業に取り

かゝる迄の糊口のためにと、或人の周旋でこの社の校正掛となつたのだが、何時の間にやら、もう三ヶ月になつた。こんな下らない仕事を男が勤めてゐて溜るものかと思ひながら、詮方なさの一日逃れで、撼天動地の抱負を胸裡に潜め、鐵啞鈴で鍛へた手に禿筆を握つて、死灰の文字をほじくつてゐるのだ。で、校正刷の堆積が先づ片付くと、予は机に眩を突いて、外ながら外交記者の壯語澤山の太平樂に耳を傾け、あの人達は、毎日内閣や議會に出入し、天下の名士と席を同じうして語り、酒酌みかはして懇談する身でありながら、何故立身榮達之道を開かず、ストロップで炙つた食パンを食つて、鬢髮徒らに白線を加ふるに至つたのであらう。明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の組であつて、今こそ破れ布子で髪蓬々としてゐるが、明年を思ひ、明後年を考へれば、想像の絲は己れを中心に、幾百の豐かなる繪畫や小説を織り出す、美麗な景も浮べば、勇壯な潮も湧く。今二三日で四十歳になる、五十歳になると云ひながら、腰辨の身を衰へとも感ぜず、無駄話に笑ひ興じてゐる彼の人々の氣が知れぬ。予は若しも四十幾歳まで、この藤椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦巻く編輯局の塵埃を吸

はねばならぬと、天命の定まつてゐるとすれば、
未練はない、今日此處で舌を嚙んで死んで見せ
る。食パンの味は一度で澤山だ、三百六十
五日晝の辨當にして味ふ必要はあるまい。自分
の一生が食パンだとすれば、二三年経験すれば
足つてゐる、何も五十迄も六十迄も食パン生
涯を續けるにも及ぶまい。

かく思ひながら小野君を見ると、小野君は雁
首のへこんだ眞鍮の煙管で臭い煙草を吸ひなが
ら、社内の騒ぎも耳に入らぬやうに、ぼんやり
窓を眺めてゐる。まだ染々話もせぬが、頭が
胡麻鹽になるまで三十幾年この社に勤務してゐ
るので、この社創立以來社で育ち社で老いた三
人の一人であるさうだ。

「どうです、小野さん、今夜はかねての約束を
實行して、何處かで一杯やらうぢやありません
か」と予は小聲で云つた。今日は月給日なれば、
どうせ一杯やらすにはゐられぬので、一人より
は二人の方が興が多いから、仲間に引込まうと
した。小野君はにやり／＼笑つて、暫らく考へ
てゐたが、「さうですなえ、一度だけお附合しま
せうか、何處か安直な處で」と、やうやく同意
らしい返事をする。

やがて編輯員は一人減り二人減り、六時にな

ると、夜勤の津崎が懐手で、のそり／＼と入
つて来て、肥満な呑氣な顔を電氣の光にさらし、
けた／＼ましく嚙をして、「畜生、風を引きさう
だぞ」と云ひながら、袂から瓶詰を出して、「今
夜は一人で忘年会だ、給仕、鯛でも買つて來
て呉れ」
「又電報を間違へて呪まれんやうにし給へ」と、
岸上は歸り支度で二版の大刷を見ながら云つ
た。

「なあに勤める所は此度勤めるさ、これでも
ね、雪が降らうが、風が吹かうが、子の刻まで
は關所を預かつて、勤務無二の僕だからこそ、
忝けなくも年末賞與大枚十圓を頂戴したのぢ
やないか、爲すべきものは忠義だね」と笑ひなが
らいつたが、急に情氣で、「しかしね、岸上君
今年は僕もつく／＼歳晩の感を起したよ」
「さうか、君の感懷なら、先づ冷酒の飲むべか
らざる所以か、前借の償むべき所以ぐらゐだ
らう」

「いや僕は眞面目に感じたのだ。もう夜勤も二
年だが、得た所は、體量が一貫目ばかり衰
へて近眼が數度を加へた位だ。實は今日晝寢か
ら起きて考へたね、十兩の恩賜は有難いが、
今年になつて、風邪に罹ること七度、下痢をす

ること三度だよ、何のことはない、肉を殺さ血
を絞つた結果だと思へば、あの僅かな金に恨が
ある」

「でも君は肥つてゐるから、自分で自分の身を食
つても食ひでがすらあ、はゝゝ」岸上は靴の音
高く階子段を駆け下つた。津崎は今日は珍らし
く、不平を並べたい風で、校正の席へ來て、鐵
くちやの大刷をのぼし、目を擧めて點檢せる小
野君の側へ立ち、

「小野さん、もう四五日しかありませんね」

「さうですなえ、又一つ歳を取りますよ」

「小野さんは月日を超越してゐるから羨ましい、
僕も去年までは自分の歳を忘れてゐたんだが、
この暮は妙に氣になる」

津崎といふ男、常に給仕を相手に、シャツ一枚
になつて相撲を取り、或は冷酒を呷つて都々／＼
を唄つたりするので、社中第一の氣樂者と思つ
てゐたのに、今夜は魔がさしたやうに哀れつぽ
いことを云ふのを、予は不思議がつてゐた。

「なあに歳を取るのが氣になる間が結構でさ
あ」

小野君は氣のない調子であつたが、役目を済
ますと、予を促して、早速社を退いて、銀座の
賑かな通へ出た。星は氷のやうに燦いて、風

はなくとも、皮膚の隙間に觸れる空氣は針のやうだが、街上は暮の忙しさを集めて活氣に満ちてゐる。で、小野君が垢染みた襟巻に首を埋めて、元氣なくしよんぼりと立つてゐるのは、如何にも見すばらしく、場所違ひの氣味がする。予は福神漬を買つて、「何處へ行かう」と訊いたが、小野君は頻りに「安直の處」を繰返すのである。予は京橋附近で飲食したことはないで、牛屋へでも一寸氣應れがして入りかねる。いつそお馴染の本郷にしようと、電車に乗つた。予は菊坂の豆腐屋の二階を借りて自炊して、電車で通つてゐるが、小野君は小石川諏訪町から徒歩で京橋へ行くので、嵐か大雪ででもないければ嘗てこの文明の恩澤に浴したことはないのである。

本郷三丁目の停留場から一町計りして、色の褪せた紺暖簾に「蛇の目館」と白く染め出した家がある。狭くはあり、綺麗でもないが、予が自炊の面倒な時に駆け込む、筋向ひの紺暖簾に比べれば疊に坐るだけでも勝つてゐる。殊に此處のみは、滅多に學生に犯されないので有難い。本郷一面西洋料理といひ、ビヤホールといひ、大學や高等學校の學生が、月末に郵便局から引出した金で、贅をやる處のみだが、此處は暖簾

の汚れてゐるお蔭か、お客は大抵予等と同類で、塵埃の中から搜し出した金を使ふのだ。

予は火鉢を真中に、小野君と差向ひで坐つて、獨斷で、かき卵、ヌタ、甘蔗などを命じた。小野君は乾からびた手の甲を火鉢の上でこすつてゐるが、食パン生涯の結果か、顔に汁氣がなく、目はどんよりして、何處を見てゐるのか分らない。

「僕にはまだ分りませんが、新聞の仕事も思つた程いゝものでもありませんね」と予は黙つてゐるのも氣が詰るから、強ひて話の緒を開いた。

「さうですとも、何をやつてもねえ」と、小野君も言譯丈の返事をして、氣乗りがしない。又二人は黙つてゐる。外は俥の掛聲、下駄の音、威勢よく叩ぶ聲、非常の騒ぎであるが、小野君は社に居ると同じく、四面の騒ぎは耳に入らぬやうで、煙草すら吸はない。神經は無くなつたのであらうか感覺は消滅したのであらうか。これではパンとビフテキと、酒と茶との區別もないのであらう、二十年も坐らされたきり、一つ處にぢつとしてゐるのも無理はない。生れて以來、席は厭だ、絹蒲團に坐りたいと、假初にも思つたことはないと思える。

「でも貴方はよく長く社に辛抱してゐますね」

「へー、まあ仕方がありますよ」
女中が霜腹れの手で、膳を突き付けるやうに並べて、銚子からは湯氣が立つてゐる。予が満ち満ちといだのを、小野君は一口に飲み干した、流石にこれにまで無神經ではないと見え、急に人相が變つて来る。二杯三杯と、予もいゝ氣持になつたが、小野君は木彫の像に魂が入つたやうに、筋肉がゆるやかに動き出した。

「貴方は随分いけるやうですね」

「まあ好きな方ですよ、矢張酒といふ奴あ甘いもんだ」と、餘蘊を詠めて、疊の上に置いた杯を眺め、背を丸くしてぐつたりしてゐる。

「そりや結構だ、私などは酒がそんなに甘いつていふ譯ぢやないんだが、獨り身で、外に樂みもないから、仕方なしに飲むんです」

「しかし仕方なしにでも飲める方が、呑みたくても飲めんよりや結構でさあ、はー、いや全く貴方が羨ましい」

「僕が羨ましいいつて云ふんですか」
「私は悪い癖があつてね、酒を飲むと、若い人が羨ましくなつたり、自分の身が衰へつぽくなつて仕様がなんです、平生は何の氣なしに聞いたり見たりしたことが、急にむら／＼と思

「無論あるでせう、又さうなくちやならん譯だ、

それから暫らくは無言で、着をつゝき杯を

素人謡曲の組くみへ入はいつたんですよ、長屋ながやで謡曲うたひな

んて、佐野帝世の成れの果か、一寸洒落てまさ
あね、はゝゝゝ」

「ぢやあお能も見にお出でせうね」

「どう致して、お能拜見どころの騒ぎですか、
まあ聞いて下さい」と小野君は居住ひを直して、
「素人組の連中は、今月は梅若、来月は寶生と、
見て廻つて色んな批評があります、私はそんな
眞似は出来なから、まあ『能樂』つていふ雜
誌を社から貰つて、それを讀むのがせめてもの
慰めだつたんでさあ。所がその雜誌さへ社に沒
收されることになつて、私の手には落ちぬやう
になつたのです。それが社の規則だから仕方が
ない、社の方ちや屑屋へ賣つても、一錢か二錢
だらうが、私に取つちや、大變な樂みで、月々
心待ちにしたんですがね。朝に一城を奪はれ、
夕に一國を奪はる、拙い譬だが、弱者はます
ます權力を剥がれてしまふんだ。そこで私あ、
すつかり斷念しました、謠曲も止めて、夕食で
も清むと茶を飲んで、ころりと横になつて、天
井の蜘蛛の巣でも見てるんです」

平生表情に缺けてる小野君の顔も、憂色を
帯びて来る。

「だつて雜誌一冊位、譯を云へば呉れんことも
ないでせう」

「いや、それを主張する丈の元氣があればいゝ
んですがね。何時か、物價は高くなる、子供
は殖える、困り切つた擧句、五重の塔から飛下
りる氣になつて増給を願ひ出たんです、すると
今ので不服ならお止めになつても差支へはない
と嚴命が下るんです、尤で雷に打たれた氣で
さあ、つまり私のやうな無能な者は、社でも必
要でなければ、世間にだつて不用な者だ。生き
てる丈が有難いお慈悲だと思ひ返してるんです
よ」

へゝゝゝと凄く笑つて、「や、斯うしちや
ゐられない。子供に春着一枚も造つてやらない
で、親爺が酒を飲んでもゐられまい、さ、歸り
ませう」とよろ／＼と立ちかゝつた。

予は勘定を引受けて、外へ出た。小野君は
「清みませんなあ」と数十度も云つて予に別れて
とぼ／＼と小石川の方へ行く。予は暫らくその
後、姿を見送つたが、小野君は荷車にぶつつか
つて、頻りに詫言をしてゐた。

その翌日、出社すると、小野君は元の石地蔵
で、何處を風が吹いてるか、冷然としてゐる。
築島や大澤は相變らず、パンを嚙つて氣焔を吐
いてゐる。予も亦一日を校正に過ぎねばなら
ぬ。已れには將來があると、心で慰めながら。

私は「評論」など執筆しながら、刻々に自己の
心に浮ぶ思ひをそのまゝに書流すことの困難
にたび／＼氣づいてゐる。私は政治について
はさして興味を有してゐないから、自己の政
治觀を存分に發表するのを憚る恐れはない
が、文學藝術や、道徳や、その他人生生存上
のいろ／＼な問題について、自己の所感を思
ふ存分に吐出すことをいつも躊躇してゐる。

言論の絶對的自由はどんな國でもどんな社
會でも許されないうに極つてゐるが、傍から
妨害されなくつても、當人自身が周囲と妥協
し讓歩すべく餘儀なくされる。赤裸々で銀座
通りを歩くことは出来ない。他の評論家諸
氏はさういふことを全く感じないのであらう
か。爲政者の壓迫のために自由に言論し得ら
れない憾みがあるだけで、自己自らおのれの
言論を束縛して、直截におのが思ひを云ひ切
れないと氣づくことがないのであらうか……
私は今度も時評の筆を動かしながら、本當の
「私評論」の六ヶしきをつく／＼感じた。

(『文藝評論の断片語』より)

玉突屋

「二本歸り三つ」と、ボーイは蟲の喰つた出つ齒を出して大聲で叫んだ。彼れは薄い座蒲團の上へ、几帳面に坐つて、兩方の袖を掻き合せてゐる。年齢は十五六で、顔は青くて脹れて、髪の毛は薄い。

背廣を着たで、つぶり肥つた男は、臺にすり寄つて身を屈め、鳥差しが鳥を狙ふやうな態度で、キューを突出した。

「三つ」と、ボーイは袖口から細い棒を出して、ゲーム盤を動かし、横を向いて欠伸をした。

向うの一臺は突手もなく、四つの玉が鈍しげに片隅に抱き合つてゐて、瓦斯の光は鈍いが、手前の一臺は明るい光の下に、紅白の玉が追ひつ追はれつ縦横無盡にころがつてゐる。ストーブを後にキューを逆について、帯を緩くだらなくしたまゝ立つてる角帽の青年は「又やられさうだな」と呟いて、相手の突振を見てゐたが、急に後を顧みて、「中原、後で君ともう一度やらう」と力んで云つた。柱にもたれてワツ

フルを掴んでゐた中原は、時計を見て、「もう十二時ぢやないか、明日にしよう」と落着いた聲で云ふ。

「いや、明日は芝へ行つて、あの話を定めて來なくちやならん」

「なに、芝の方は急がなくてもいいさ」

「だつて早く定めなければ氣になつてならん、相手が愚圖だから」

「急勝ちだね」と、中原はゲーム盤を見て、

「栗山さん、今日は全勝ですね」

「へムム」と、栗山はキューを扱いてゐたが、

コツツと音がして、手玉は外れたので、「こりやどうした」と、禿頭をつるりと掻でて、厭な笑ひをして、ストーブの側へ來た。

「さあ一キューで取り切るか」と、角帽は勢よく立上り、チョークをギシ／＼付けながら玉臺を見て、チェツと舌打して「厭な玉だね」と、首を二三度捻り、「かう行つてかう來るか」と、臺の上に乗り上つて、邪慳にキューを出した。兵

兒帯がだらりと垂れる。

「二つ」と、氣拔けのした聲でボーイが呼ぶ。

「おい五だぜ、確かり見とれ、ゲーム取りならゲーム取りらしくするんだぜ」と横目でじろりとボーイを見た。

「五つ」とボーイは數へ直して、目をぱつちり開けたが、次第に上目蓋が垂れて來る。生欠伸が喉を突いて來るのを漸く噛み殺したが、涙が目に浮ぶ。

角帽は眉を顰め、口を捻り、首を動かし、襟を寬くボタンの取れたシャツの廣く出てるのも關はず、熱心に突いてゐる。栗山は葉巻の先を爪でつまみながら、「玉は今時分からよく突ける、不思議なものだ、世間がしんとして來るとキューも寄えて來る」と、ストーブに顔がぼてつてゐる。

「ぢや、今夜は徹夜して突きますか」と、角帽はクシヨンの方向を目で計つてゐる。ボーイは氣遣はしうに栗山の顔を見てゐたが、栗山は「へムム、徹夜も面白いな、明日は日曜だし」と、悪くすると徹夜案が成立しうなので、幽かに溜息をついた。で、坐り直して、足の痺れを撫り、ぺこ／＼の腹に力を入れ、「二つ」「三つ」と付元氣で叫んだが、頭は次第に下つてぼうつとする、と、身體が地べたからず／＼と

引上げられるやうな氣になり、そのまゝ遠い處へ持つて行かれさうになつたが、ガチャツと音がしたので目を細く開けて、「三つ」と夢心地で叫んだ。十二時が打つた。

栗山は火の熱で汗ばんだ手に白粉を振りかけ、立變つてキューを執り、「早いものだ、もう十二時だ、家に居りや、とても今時分まで起きてらりやしない」

「中原昨夜の今時分はどうだい」と、角帽は意味ありげにや／＼と笑つてゐる。

「フ、ン」と、中原はコークスを指先で抓んで、ストーブへ投げ込み、「お蔭で今日は二時頃まで寝てしまつた」

「起きては玉を突き、飲んちや寝てりや、それで春は來るんだが、どうもかう玉突屋にばかり日參しても困るよ」

「い／＼ぢやないか、學問で喰へなきやキューボーイになるさ、その方が洒落てるぜ、フツ／＼フツ」

「それも存氣でい／＼ね、しかし何時までもこんなことをして遊んでもゐられまいよ」

「良心が咎めるか、君やそんな事をちよい／＼考へ出すから酒も玉も上達しないんだよ」

「さうだね、少くとも君を對て負かす程にな

らなくちや癢に觸らあゝと、ワツフルの残りをむしや／＼平らげた。

「勝負有」とボーイは三人の顔を順々に見たが、北風が玻璃窓に吹きつけるので、音を聞いただけで首をすくめて、兩手を前垂の下へ入れて背を丸くした。

「さあ、も一度」と、角帽は目を光らせて、玉を並べる。

ボーイは恨めしげな顔付をして、「栗山さん、も一ゲーム如何です」と哀れな聲で云つた。

「もう迎いから止さうか」と、栗山は迷つてゐる。

「一時前か」と、ボーイは獨言のやうに云つたが、角帽は帶を締め直して威勢よく、

「なあに、まだ十二時を十五分過ぎたばかりさ、十分もあればゲームになりますよ」と促すので、栗山は時計を見て、「今二十分だね、ぢや、やるかな」とキューを執つて、「どうです、十位下げますかね」

「なあに大丈夫、今度負けたら玉はお止めだ」「いや君の止める／＼も當てにやならんよ」と、中原は腰を掛けたまゝ、足拍子を取つてゐる。

ボーイはゲーム盤を直して、「二つ」「三つ」「五つ」と數へ出したが、少し當りが途切れると、前

に屈みさうになる。眠りをまぎらしたくも、軍歌も歌へず、足も動かせず、手も動かぬ。で、詮方なしに齒を喰ひしぱり目を見詰め心を凝らしてゐると、かつとした目眩しい光が前に擴がつて、青い臺と白い玉と紅い玉とが、浪の上にでも漂うてゐるかの如く見える。しかし無意識に「二つ」「三つ」と叫んでゐたが、やがて口も目も緩んで、心がとろ／＼になり、自分の故郷で弟を連れて綿眼兒捕りに行つてゐる氣になつた。枝の上に緑の羽を重ね合つて、一處にピー／＼鳴いてゐる。で、鶴竿を持つて近寄らうとしたが、身體が縛られてるやうで近づけぬ。矢鱈に藻掻いてると、ズドンと音がして、鳥は飛んでしまつた。

「おい吉公」と角帽は怒鳴つて、「居睡りなんかしないでゲームを取れ、今までよく數へなかつたんだらう、聲がしなかつた」

「いえ、數へてゐたんです」と、出鱈目に數を取つて、「十八ゲーム」

「ふ／＼ん、い／＼取切るか」と、角帽はにこにこして臺を廻つてゐる。

「さあ、それが済んだら、おれが最後の一撃を與へて歸ることにしよう、もうそろ／＼眠くなつた」と、中原は欠伸をした。

夜番の拍子木が地の底からのやうに幽かに聞える。

ボーイは百年も千年も「二つ」「三つ」と繰返し繰返し叫ばねば、打倒れて熟眠は出来ぬ運を背負つてゐるやうに感じて、涙聲で「當りゲーム」

淡島寒月氏

「中央公論」の六月號に、生方敏郎氏と内田魯庵氏とが、この頃逝去した淡島寒月氏について語つてゐる。寒月といふ人は明治最初の西鶴本の蒐集家で、紅葉も露伴も氏の藏書を借覽して、元祿文學を學んだのだといふことは、私も學生時代から知つてゐたが、氏に關して、その他のことは何も知らなかつた。まだ生き

てゐるのかしら、もう疾づくに死んでゐるのではないかと思つたこともあつた。

それで、私は今度、生方内田兩氏の追憶記によつて、はじめて趣味の人淡島寒月の一生についていくらか知ることを得たのだが、私が面白く感じたのは、七十近くまでの長い生涯を、殆んど何等の金取仕事をしないで過す人が、今日の時世にでも、まだ随分存在してゐるといふことである。江戸時代には、父祖の遺産などを手頼りにして、貧弱な風流を樂んで一生を過した人が多かつた。(それは壓制政治の下で、自由に自己の天分を發揮し得なかつたのもあつたらうが) いくら昔の世でも、白癡か病人でない限りは、何もしないで日を送る譯には行かないから、狂歌や俳諧を學ぶとか、書畫をいづるとか、和蘭の骨董でも集めるとか、何かの道樂をはじめなければならなかつたのであらう。酒色の慾に沈溺するよりも上品で高雅でいゝのであらうが、私は江戸時代の風流人に對しては、ちつとも敬意が寄せられない。

私はトルストイのことを書いた後だつたので、淡島寒月とトルストイの二人を對照させて考へた。トルストイは豊富なる資産を有し

てゐるに關はず、自ら好んで、焦慮煩悶して、八十餘年の間悠然として南山を望んだことは一度もなかつた。「カリフのアブツラマ」は、その一生の中に、十四日の幸福な日があつたと云ふが、私には屹度それだけの日もなかつたに違ひない」と、彼れはゴルキとチエホフとに向つて云つてゐる。

寒月のやうな一生を過す人もあり、トルストイのやうに一生を過す人もある。キリストをもマリアをも閑餘のオモチャとして扱つてゐた江戸の通人の目には、トルストイの如きは、血迷つた新五左衛門で、話せない奴として映つたであらう。私などは、二人のうちのことちらのやうにして晩年を過したらいゝかと今考へたが、どちらにもなれさうでない。

(文藝評論より)

何處

(一)

可愛い目元をほんのり酒に染めた女が高くさし掛けた傘の下に入つて、菅沼健次は敷石傳ひに門口へ來た。

「ぢや明後日、峠度ですよ」と、女中は笑顔で覗き込み、艶氣を含んだ低い聲で云つた。

「むん」と健次は女の顔をも見ず、引たくるやうに傘を取つて、さつさと急ぎ足で歩き出したが、五六間も歩んで我知らず振返ると、「鳥」と行書で書いた濕つた軒燈の下に彼女がぼんやり立つてゐる。

健次は何の譯もなく微笑する。女も微笑して、胸を突出して會釋する。

それも一瞬間で、健次は傘を肩にかけ、側目も振らず上野の廣小路へ出て、道を山下の方へ取る。

昨日の天長節に降り通した雨は、今日も一日経間なく、濕つぱい夜風が冷たく頬に吹き當る。往來の人々は皆傘を斜めに膝を曲げて、ちよこ

ちよこと小股に急いでゐる。健次も膝から下はびしょ濡れになつたが、敢てそれを氣に留めるでもなく、只いゝ氣持で、口の内で小唄が何か呟いて、沈んだ空へ酒臭い息を吐きながら、根岸の近くまで來ると、横合から底の深い大きな蝙蝠傘が、不意に健次の蛇の目にぶつかかる。チエツと舌打して避けようとする機會に、蝙蝠傘の男が聲をかけて、

「やあ君」と立留つた。

健次は少し驚いて、

「やあ君か、何處へ行つた」

「君の家さ、今夜は雨だから、峠ゐるだらうと思つたのに、何處を浮れてた、いゝ顔つきをしてるぢやないか」

「そりや氣の毒だつたね、これから僕の家へ行くからぢやないか」

「いや、もう遅いからよさう」と、蝙蝠傘の男は長い身體を屈めて、下駄屋の時計をのぞいて見て、「もう彼此九時だね」と一寸考へ「實は君に少しお頼みがあるんだが……此處で話して

もいゝが、どうだ其邊の珈琲店へでも寄つて呉れんか」と、首をまはして周囲を捜す。

「ぢや、さうしよう、この先きにいゝ家がある」と、健次は先きに立つて、半町ばかり泥濘の中を通つて、擦玻璃に一品亭とある小さい西洋料理店へ行つた。

客は一人もゐない。白布で蔽つたテーブルの上に火鉢を置いて、籐椅子が四五脚周囲に不秩序に置かれてある。健次は火鉢の火を掻き廻して、

「君は馬鹿に寒さうぢやないか、さあ當り給へ」と云つて、巻煙草に火をつけて、反身で椅子に寄つかゝり、頻りに瞬をしながら仰向いて煙草を吸ふ。

今迄板の間に腰掛け、左右の袖を掻き合はせて居眠りをしてゐた小娘が、高い足駄を引摺つて、

「お誂へはと寝呆聲で聞く。

「寒いから日本酒がいゝだらう、料理は何がいゝ、ピフテキにでもするか」と、骨太い手を火鉢の上に翳しほかんとしてゐる相手の顔を見て、黙諾を得て、健次は小娘に命じた。

この丈高き男は織田當吉と云ひ、健次が昔

の同窓の友で、今は私立學校に英語の教師を勤め、傍ら翻譯などをしてゐる。年齢は健次より僅か一つ上だが、健次の小柄で若く見えるのに反して、格段に老けて見える。丈の高きのみならず、それに釣合ふ程に肉付きもよく、見た所魁偉なる人物であるが、何處となく身體にゆるみがある。鬚氣が足らぬ。顔は平たく目は細く、耳は福々と垂れてゐる。

「君は相變らず氣樂さうだね、殊に今日は愉快な顔をしてるぢやないか」と、織田は健次を見て、ゆつたりした聲で云ふ。

「はゝゝ、さう見えるかな、これで二三日打續けだよ、まあ社の方が暇つぶしで、遊ぶ方が本職のやうなものだ、しかし本職となると、遊ぶ方法に苦心する。如何にして遊ぶべきかが、僕の當面の問題である」と、陽氣な聲で、一寸柱田博士の假聲を使ひ、顔に愛嬌を湛へて微笑笑する。

「まあ遊べる間は遊ぶがいゝやね、しかし今もね、君の母堂と話して來たんだが、健次も此頃は酒好きになつて困ると云つてたよ、祖父さんのやうにならなきやいゝがと云つてゐられた」

「さうか、僕の母方の祖父は、大酒呑みで終ひには狂人になつて死んだんだからね、それに僕

の顔が次第に祖父に似て來るさうだから、母は心配してるだらう」

「何、さうでもないらしい、只早く嫁を貰ひたいやうな話をしてゐた、僕にもいゝのを見つけて呉れて、本氣で云つてられたよ、親は有難いものだね」

「さうかね」と、健次は嘲るやうに云つて、「君も精々美人を搜して呉れ給へな」

「そんな氣があるんなら周旋しよう、しかし何だよ」と云ひかけた所へ、小娘が銚子を持つて來ると、織田はボカンとして、前の話の緒を忘れてしまひ、健次の矢繼早にさす盃を三四杯引受けた。

「で、君、僕に用事と言つて何だい」と、健次は強い調子で押付けるやうに云ふと、織田は、「何、急な事でもないんだがね」と、前に自分が頼みがある」と云つた癖に、その用談を避けるやうにして、ピフテキの小さい切れをもぐ／＼させながら、顔を擧め、「非常に堅い」と呟き、暫らく無言の後、「僕も弱つたぜ、親爺の病氣がますますよくないんで、入院させなくやならんのだ、まだ確定はしないが、どうも胃痛らしい」

と、フォークとナイフを持つたまゝ、仰向いて云つたが、顔にも言葉にも弱つてる様子は

見えず、例の通りボカンとしてゐる。

「さうかい、そりや困つたね」と、健次は少しも手を付けぬ皿を見詰めたなりで、氣のない聲で云ひ、心でも左程同情してる風はない。織田は相手に頓着なく、悠長な聲で、

「妻は身が重いし、母はあの通りの無精者で、一日煙草ばかり吸つてて役に立たず、妹は學校へ行つたきりで、遅くまで歸つて來んから、何もかも僕一人でやらなくやならんのでね、本當に困るよ、それでこの四五日は學校も缺勤ばかりしてる」

「ぢや妹を學校へやつて、君は缺勤して家の世話をしてるんだね、しかし病人の看護なんか君の適任ぢやないね」

「だつて仕方がないさ、どうも一家の主人となると面倒なものだ、今に君も結婚すると困るぜ、何だのかだのと、そりや五月蠅くつてね、それに子供なんか出來なきやいゝんだが」

「そいつあ當然だから仕方がないさ、しかし僕だつたら、家が五月蠅けりや一日外へ出てゐらあ、女房の産の世話から借金と言譯まで亭主がしなくつたつていゝ」

「さうもいかんよ、君、それに僕の月給が安いから、平生だつて内職をしなくや引足らんの

に、病人が出來ちや災難だ、だから此頃は酒どころぢやない、煙草も止めてしまつた」と、少し萎れた。その様子を見ると、健次は急に不慣れになり、

「だが君は感心だよ、家庭のために犠牲になるから」と云つて、後を見て、「もう一本」と叫んだ。

「僕はもういゝよ、遅くなると家で心配するから、そろゝ歸らなくちや」

「まあいゝさ、久振りだから、もう少し話をしようぢやないか」と、健次は少しも手を付けぬ血を押しのけ、煙草を銜へたまゝ腕組して、半ば目を閉ぢ、降りしきる雨の音やら、幽かに響く俵の掛聲やら、前を通つる按摩の震へ聲に耳を傾け、森とした淋しい空氣に心が吸込まれ、快活な色も顔から失せかゝつて來たが、コトンと鈍子の音がするので、振返つてバツと目を開けた。悪夢から醒めたやうに、鋭く四圍を見まはし、やがて眉をびりゝとさせ、二本の指で熱さうに鈍子の首を持つて、

「さあ受け給へ」と、無造作に相手の盃へどぶどぶと注ぎ、「そして肝心の用事は何だい」と問ふと、織田は言僧さうに暫らく口籠り、「少し無理なお願ひだがね」と、盃を持つては

置き／＼して、「又原稿の事さ」と、氣の毒さうに云ふ。

「うん原稿の周旋か、僕が引受けてどうかしよう」と、健次は快く首づく。織田はやうやく安心したらしく、甘さうに盃を呑み干して健次に差し、

「實際忙しい間に書いたので、よくはなからうがね、それでも暇書きぢやないんだ、會話にや格別苦心して、一機軸を出したつもりだから、まあ讀んで呉れ給へ、物はゴルキーの小説だ」

「さうか、いゝだらう」と、健次は軽く答へて、物が何であれ、譯筆が何であれ、そんな事は身を入れて聞かうともせぬ。

「それからね、少し無理だが原稿料を早く貰つて呉れまいか、月初めから一文無しだから、それに……」

と、健次の煙草を一本取つて、指先きで揉みながら、何をか訴へんとする。それと見て健次は頭から打消し、

「よし／＼、それも僕が受合つた、引替へに貰つてやらう」と話を轉じ、「で、君は此頃箕浦に會つたか」と何時も長々と聞かされる無味の生活談や金

錢論は避けようとする。

「うん昨日見舞ひに來て呉れたがね、會ふと例の通り大きな人生問題を論じてる。讀書も盛にやつてるやうだし、此頃は長い論文も書いてるさうだ、いづれ君の所へでも持込むだらう、し

かしね、僕が云ふんだが、箕浦なんかは已惚が過ぎる、人生がどうの宇宙がかうのと、人間が御託を並べるのは、身の程知らずの極だ、獨身で親爺の腔でも囁つてる間は、そんな事を道樂

にしてゐられようがね、家庭でも造つて、一人前の人間になると、そんな事は馬鹿々々しくて問題にもならんさ

と、多少の活氣を帯びて論ずる。健次は微紅の艶々した頬に靨を見せ、切れの長い目尻に皺を寄せ、

「はゝゝゝ、珍らしく君の名論を聞けね、しかし箕浦はコッ／＼根氣よく學問を續けてるし、文章も上手になつたぢやないか、感心だよ」

「今に肺病か腸病になるのが落ちた」と、織田は澄ましてゐる。

「いや博士ぐらゐにやなれらあ」と、健次は皮肉に云つて、「だが箕浦は君の妹に惚れてるよ」と、少し乗出して、聲を低くする。「馬鹿なことを」と、織田は締りのない大口を開

けて、ハッ／＼と笑ふ。

「うんにや惚れてる、君の目にやどうだか、僕には一目瞭然よ」

「さうか知らん」

「さうだとも、それにね君の妹のラブしてる男がある」

「え、本當かい君、虚言だらう、君はよく色んなことを云つて、僕を調戲ふからいかんよ、若し本當なら相手が誰れだか聞かせて呉れ給へ、僕も一家の主人だから、妹の身の上についても責任があるんだもの、間違ひのないやうに警戒しなくちやならん」

「いくら警戒したつて駄目さ、歳頃の女が色氣づくのは當然ぢやないか、で、若し相手が分つたらどうする、妹を柱にでも縛りつけるかい」

「君、そんな馬鹿な真似をするものか、僕は何さ、向うが相當の男だつたら正式の結婚さすし、不相當の男だつたら思ひ切らせる」

「成程譯の分つた兄様だ、何處の親だつてそれと同様の事を申します」

「だつて主人の義務としてそれが當然ぢやないか、君ならどうする」

「僕なら放任とかあ」

「馬鹿な、君も箕浦流の空論家だね」

「ふん、僕と箕浦とは一荷にならんぜ、向う様は本をどつさり抱いてるから貫日があらあね」

「君は氣樂な事ばかり云つてるが、僕は何時も確信してる、人間は要するに僕のやうにならにや虚言だ、遅かれ遅かれ君なども同じ道へ落ちて来るんだ」

健次はぞつと寒氣がして、思はず手を火鉢に觸し、織田の顔を見詰め、

「お互ひに君の道連れになつて、テク／＼歩きで、電信柱でも數へて行くんだね、大通りの左側を歩いてりや、自然に日本橋へ出られる」

「君、戲言は止して、今の話の相手は誰れだい、一體向うの男は妹を思つてるんかい」

「さあ、どうだかね、よく知らんよ」

「誰れだらう」と、頬杖ついて、眞面目に考へてゐる。

健次は人差指でテーブルを打ちながら、「先あ左程にも思やせぬ」と小聲で唄つてゐたが、急に何をか感じて、額に皺を寄せ、邪慳に煙草の吸口を嚙み出した。

織田は思ひ飽んで面を上げ、「君は不歸に煙草を吸つてゐる、毒だよ」

「毒だつていゝさ」と、健次は吸殻を吐き出し、

「僕は阿片を吸つて見たくてならん、あれを吸ふと、身體がとろけちやつて、金鶏動草も壽命も入らなくなるさうだ、阿片だ／＼、あれに限る」

と、獨りで合點してゐる。それが戲言とも思はず、眞から感じてゐるやうなので、織田は細い目を丸くして、

「よくそんな下らぬ事を眞面目で考へてゐね、阿片でなくつたつて、快味を感じるものは幾らもあるぢやないか」

「さうかね、僕はこれ程煙草を吸つても、眞に甘いと思つたことは一度もないよ、酒だつてさうだ、ピフテキだつてさうだ、一寸舌の先で甘いと思つても、染々と五體がとろける程快味を感じたことがない。どうも物足らんね、それで何時も思ふんだ、何處か世界の隅つこに最上の珍珠が潜んでるに違ひない、僕はそいつを捜し出した、で、今もそれを考へてたんだが、或はその珍珠が阿片ぢやないか知らん、阿片を吸ひ出すと、何にも代へられんぢやないか」

「馬鹿な」と、織田は一口に斥けて、「まだ甘い料理を食はんから、そんな事が云つてられるんだ、櫻木の鳥なんか食べて、甘い物がないうんで廣言する權利はないよ」と、天蘇羅鰐梅盛